

知的障害のある生徒に対するキャリア発達を促すホームルーム活動の在り方に関する研究 —目標設定、振り返りと対話に着目して—

教職実践専攻・ミドルリーダー養成コース
学籍番号 21GP105 氏名 田中 美紀

1 はじめに

本校は、中学校及び特別支援学校中学部を卒業した知的障害のある生徒が在籍する高等部専門学科単置校であり、将来の社会的・職業的自立に向けた教育活動を展開している。

近年、子どもたちを取り巻く環境の変化は激しく、予測困難な状況であるため、学びを人生や社会と関連付け、仲間と協力しながら目の前の状況に柔軟に対応できる力を育む、キャリア発達を促すキャリア教育がより重要視されている。今般の学習指導要領では、学校種別を越えて総則の「児童又は生徒の調和的な発達の支援」に「学級（ホームルーム）経営」「生徒指導」「キャリア教育」が位置付けられ、高等学校及び特別支援学校高等部においても、特別活動が学校教育全体を通して行うキャリア教育の要となることや「一人一人のキャリア形成と自己実現」に関する内容が示された。ホームルーム（以下、HR）活動は、学校生活で最も基礎的な集団である HR を基盤とした、卒業後の職場や家庭等での集団生活につながる活動であり、他者と共生しながら自己実現を図っていく活動と言える。

また、青森県教育委員会（2019）においても、キャリア教育の充実に向けて、「児童生徒が学びの過程を振り返り、将来の生活や社会とのかかわりを考え、将来の生き方や進路について選択したり、決定したりすること、学んだことを生かし、目標を修正しながら自己実現を目指すことができるように、授業改善の取組を進める」必要性を示している。

これらの背景を踏まえ、生徒の「なりたい」「ありたい」姿の実現に向けて、HR 活動における対話をとおした目標設定と振り返りを行い、内面の育ちを促すことが重要と考えた。

2 研究の目的と仮説

(1) 研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究ではキャリア発達を促す視点から、生徒の「思い」や「願い」を踏まえたいまと将来をつなぐ「対話」が重要であると考えた。そのため HR 活動を中心に対話を重視した実践の充実を図るとともに、その有効性について検証し、効果的な手立てを明らかにすることを目的とした。研究の全体構造を図 1 に示す。

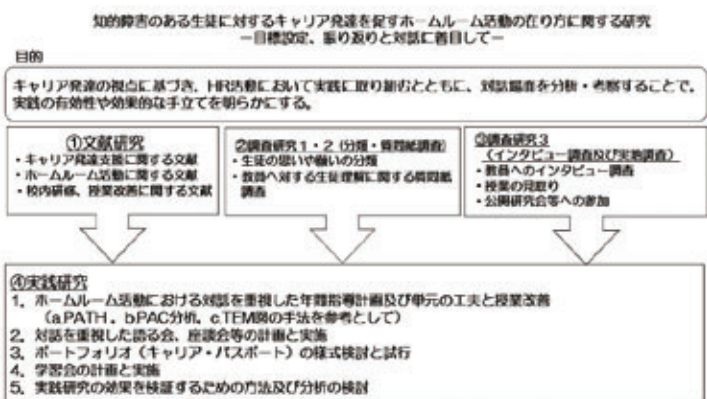


図 1 研究の全体構造

(2) 研究仮説

- ①キャリア発達の見点に基づき、HR 活動における対話をとおした目標設定と振り返りのサイクルを踏まえた計画的・意図的な指導を行うことで、生徒が自己の「なりたい」「ありたい」姿の実現に向かって諸活動に取り組もうとするようになり、内面の育ちを促すことができるのではないかと。
- ②生徒の「思い」や「願い」を出発点とした対話をとおして生徒理解に努めることで、教員の生徒指導等に関する資質・能力の向上を図ることができるのではないかと。

3 1年次の取組

(1) 文献研究

CiNii (学術情報ナビゲータ) で、次のキーワードで論文検索(検索日 2021年12月26日)したところ、①「知的障害, 目標設定」32件, ②「知的障害, 対話」43件, ③「知的障害, 振り返り」27件を抽出した。①②については半数以上, ③は3割以上が過去5年間のものであることから, 学習指導要領改訂に伴った動きであることが推察された。一方で, 「知的障害, 目標設定, 対話, 振り返り」「知的障害, HR活動」では0件, 「知的障害, 学級活動」は1件該当した。なお, 知的障害を対象としない目標設定に関する論文の多くで, Locke(1969)が提唱した目標設定理論が引用されていた。目標設定理論では, 「明確で挑戦性のある目標が do one's best の単純目標よりも高いパフォーマンスを生んでいる」ことや, 「本人が注意を向けること, 努力を結集させること, 課題遂行の方略を発展させる動機づけ要因となることにより, パフォーマンスに影響をおよぼす」ことを示している。

また, 梶田¹⁾は, 目標の意識化において, 「長期目標(願い)と, 今ここで当面している目標や課題(ねらい)の二重構造が望ましい」ことや, 「教師の語りかけと同時に学習者が自覚をもつようになる機会と場が必要である」ことを指摘している。また, 内面の育ちについて「何によって気持ちが動くようになるのかが重要である²⁾と述べている。

さらに菊地³⁾は, 児童生徒自身が多様な人・こと・ものとのかかわりや「対話」をとおして感じ, 理解し意味付けられるようにしていくことが有効であると述べている。また, 内面の育ちを促し, 気付くための有効なアプローチの1つとして重要な意味をもつものが「振り返り」による「対話」であり, 「なぜ・なんのため」「どうして」「どうしたい」という本人の思いが重要である⁴⁾と述べている。

(2) 調査研究1 生徒の思いや願い

- ①目的 本校生徒が思い描いている願いの傾向について明らかにする。
- ②方法 個別の教育支援計画に記載されている本人の願いを, 個人が特定できないようカテゴリーに分類した結果を表1に示す。

表1 生徒の思いや願い

上位カテゴリー	下位カテゴリー	記述(一部抜粋) n=123
職業(74)	希望の職種 (70)	・介護施設で働きたい・飲食関係の仕事に就きたい 他 68件
	その他 (4)	・人の役に立てる仕事に就きたい・やりたいことを見つけない 他 2件
資質・能力(27)	身に付けたい力 (11)	・パソコンの技術を高めたい・集中力を身に付けたい 他 9件
	対人関係 (9)	・人に優しく接したい・積極的に自分の気持ちを伝えたい ・人付き合いができるようになりたい 他 6件
	その他 (7)	・生徒会役員として, 見本となる振る舞いをしたい・自分で体調管理し学校生活を送りたい・ポジティブに考えられるようになりたい 他 4件
余暇(9)	スポーツ (4)	・サッカークラブに所属したい・家族とスポーツ観戦したい 他 2件
	レジャー活動 (3)	・休日友人と遊びたい・家族と旅行に行きたい・買い物をしたい
	趣味 (2)	・自分で楽しめる趣味を見つけない・絵を描く, 音楽を聴く
自立した生活(13)	家事 (7)	・片付けや掃除等家事を手伝いたい・料理, 皿洗いをしたい 他 5件
	一人暮らし (6)	・料理が上手になりたい・家族の食事を作れるようになりたい 他 4件

記述内容について, 1年生では主に働くことや挑戦してみたいことへの思いを中心に挙げられていた。学年進行に伴い, 自立した生活や地域生活を視野に入れた具体的な内容が多くなる傾向が見られた。全体をとおして, 生徒個々に目標をもっていること, 様々な経験をとおして仲間とのかかわりや自立に向けた願いを変化させていると捉えられた。

(3) 調査研究2 生徒理解において大切にしていること

- ①目的 本校教員が日々の指導・支援にあたり「生徒理解において大切にしていること」を明らかにする。
- ②方法 本校教員を対象に質問紙調査を行い, 生徒理解において大切にしていること3点について記述を求めた。記述内容をカテゴリー分類した結果を表2に示す。

表 2 生徒理解において大切にしていること

上位カテゴリー	下位カテゴリー	n=93 31名×3件
会話・対話 (29)	傾聴(14) 会話(8) 受容・共感 (6) 対話(1)	
かかわり (27)	共に(5) 生徒の強み(4) 本人の思い(3) 距離感(3) 冷静(2) 個性の尊重(2) 雰囲気づくり(1) 先を見通す(1) その他(6)	
実態把握 (26)	様子観察(13) 記録(5) 面談(3) 環境把握(3) 特性理解 (2)	
組織連携 (11)	教員間の情報共有(10) 保護者連携(1)	

本調査から、本校教員が生徒の実態把握を踏まえ、共感的対応に努めていること、生徒の内面を理解し共に歩もうという思いを有していること、一人一人の可能性に期待し、指導・支援していることが確認された。

(4) 調査研究3 本校教職員が感じていること、思いや願い

- ①目標 本校教員が「指導・支援において感じている思いや願い」を明らかにする。
- ②方法 調査研究2の結果を踏まえて、学級担任や各主任等に対して、半構造化インタビューを実施した。結果の一部を表3に示す。

表 3 本校教職員が感じていること、思いや願い

A	生徒の実態も多様化している。個々の生徒の実態に応じた適切な指導・支援が必要。授業改善、UDに基づいた授業づくり、教育課程の再考が必要な時期であるのかもしれない。
B	本校は、「自分のいいところを発見できる」「みんなが主役になれる学校」である。近年、実態差も大きく、精神的に配慮が必要な生徒も増えている。生徒指導面での課題が多いと感じている。
C	身近に憧れる先輩(ロールモデル)の存在を大事にしてほしい。卒業生を送り出してきた中で、魅力あるモデルとの出会いが、学校生活への意識を変えるきっかけになっていたと思う。
D	生徒が花。教員は土壌になじむ指導・支援をすることが大切。花を咲かせるためには、組織連携が重要。教員が生徒の見取りと見立てを適切に行う必要がある。産業科としての「育てたい子どもの姿」の共有が必要だと感じる。
E	生徒は常に一生懸命であり、教員として大事にしていかなければならない部分であると捉えている。授業において、できることは変えていきたいという意識はある。
F	本校に入学後、新たな集団の中で、同年代の仲間同士が学び合える環境下にある。他者との関わりをとおして、伝え合える喜びを感じてほしい。
G	挨拶がよく、活気がある集団であると感じる。一方で、自分の調子や症状を上手く表現することが難しい生徒もいる。自分の気持ちを相手に言葉で伝えることができればよいと感じている。
H	本校は多業務を行う実情があるが、組織として授業改善と校内研修は大事にしたいと捉えている。

調査研究3においても、調査研究1・2と同様に、教員は生徒が「なりたい」「ありたい」といった目指す姿をもっていることと捉え、生徒を理解したいという「思い」やよりよい指導・支援につなげたいといった「願い」をもち、実践していることが確認できた。

(5) 1年次の成果と課題

文献研究では、本研究のキーワードに関連する知見や動向を把握することができた。また、調査研究では、本校生徒及び教員の思いや願いを把握した。これらを組織が有する原動力として捉え、2年次は実践研究を進めていくこととした。また、実践研究の実施に向けて、HR活動の年間指導計画や単元構成の工夫及び各教科との関連の精査、キャリア教育に関する教職員の専門性及び資質・能力の向上に向けた研修実施の必要性が確認された。

4 2年次の取組

筆者は1学年(4学級33名、本学級は8名在籍)の学級担任となった。HR活動を中心に職業科と関連付けた授業実践に取り組み、その効果を検証することとした(表4)。

表 4 本年度の研究計画

期	I期				II期							
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	ホームルーム活動を要とした対話を重視した年間指導計画及び単元の工夫、対話を重視した語る会、座談会の実施 * 研究のまとめ											
授業実践	ツール	PATH ①	PAC 分析①	TEM 図 ①	CP	CP	PAC 分析②	PATH ②	TEM 図 ②	CP	PATH ③	CP TEM 図 ③
	語る会			○			○	○	○			
	調査	アンケート①		アンケート②				アンケート③				
教員研修	研修			研修会			学習会			研修会		
	調査			アンケート①						アンケート② インタビュー調査		

(1) HR 活動を要とした対話を重視した単元の工夫と授業改善

本学級生徒を対象に、生徒間、対教師との共同的な取組や対話をとおして気付きを促すことをねらい、以下の3つの手法を参考とした授業実践に取り組んだ。

①PATHの手法を参考とした職業科の授業「Aさんの未来計画」(目標設定)

PATH(Planning Alternative Tomorrow with Hope)とは、フォレストら(2001)が開発したワークショップ手法であり、希望に満ちたもう一つの未来計画の略称である。本人とそれにかかわる多くの人と一緒に会してその人の夢や希望に基づきゴールを設定し達成するための作戦会議である(干川, 2002)。PATHの実施により、生徒がこれからの学校生活に期待感をもって過ごすことや、目標達成に向けて実践することをねらいとした。

生徒Aは「保育士になりたい」という夢を挙げ、「必要な人や力」、「はじめの一步」等について生徒同士で検討した。授業の振り返りでは、「今までこんな経験をしたことがない。みんなと話せて解決して楽しい」「なりたい自分になるために、憧れの先輩に近づくために、目標に向かって努力することが大切だとわかった」という感想が得られた。

②PAC分析を活用したHR活動の授業「校内実習を振り返って」(振り返り・目標設定)

PAC(Personal Attitude Construct)分析とは、あるテーマについて個人がもつイメージや態度を分析する質的研究法である(内藤, 1993)。入学後初めての職業教育の一環として行う校内実習後に、所属する専門教科班での振り返りを基に、学級の仲間と共有し、気付きを広げ深めることをねらいとした。2~3名のグループ構成とし、筆者がファシリテーターとなって進行した。PAC分析における連想語の手続きについては、生徒の実態を考慮し、マンダラート(今泉, 1987)を用いて上限8つ以内となるように焦点化した。デンドログラムを基に話し合いを行い、生徒からは「友達から学んだことは、みんな嫌な事があっても折り合いを付けていることを知った」「Bさんは、いろいろ悩みながらも成長したと思う」「自分ももっときちんとしてないとダメだと思った。」といった気付きが得られた。生徒それぞれが対話での意見交換を自分事として捉えることができたことと推察された。また、相手のことを考えていると推察される内容も挙げられた。後期現場実習を終えて、「働くために必要だと思ったこと」についてキーワードでの表現を求めたところ、経験から学んだことやこれからもっと高めていきたいと思うことなどが挙げられた(表5)。キーワードの背景を問うと、実習中に起こったエピソードとの関連が大きいと捉えられた。また、他者の身に立った見方や考え方を取り入れた思いがキーワードとして挙げられていた。

表5 キーワードの変化

生徒	校内実習後(6月)	後期現場実習後(10月)
A	体力、集中力、大きな声、笑顔、作業力、態度、仕事内容を覚える、てきぱき働く	集中力、大きな声、てきぱき動く、態度、笑顔、仕事内容を覚える、作業力、コミュニケーション力
B	礼儀、知識、体力、集中力、行動力、責任力	体力、礼儀、健康、意欲的、学ぶ姿勢、行動、考える力、コミュニケーション能力
C	お金、力、人間関係、食、コミュニケーション、楽、精神力、圧	力、食、会話、お金、人間関係、癒やし、家、協力
D	体力、忍耐力、パワー、技術力、注意力、経験、コミュニケーション力、先を見通す力	集中力、判断力、持続性、人間関係、礼儀、自分や同僚の足りないところをカバーし合う、想像力、自分の管理
E	動画編集になれる、オリジナルキャラクターを作る、興味のあることを探す	継続力、責任感、時間を守る、集中力、コミュニケーション、素直さ、整理整頓、丁寧さ
F	大きな声、集中力、体力、身だしなみ、体調管理、仕事の能率、安全性、持続性	体力、コミュニケーション、速さ、態度、食事、言葉遣い、集中力
G	体力、集中力、コミュニケーション、注意力、分からない事を聞く、声を出す、早寝早起きをする、他の人と協力する	やりきる力、自信、チャレンジ、笑顔、努力、体調管理、素直に伝える、安心
H	体力、努力、清潔、才能、体調管理、笑顔、言葉遣い、メンタル	体力、信頼関係、技術、人の気持ちを考える、笑顔、集中力、コミュニケーション力、声を出す

③TEM図の手法を参考としたHR活動及び職業科の授業(振り返り)

TEM(Trajectory Equifinality Model)とは、サトウ(2006)らが開発した複線径路・等至性モデルの略称であり、人間の発達と人生径路の多様性と複線性を捉え描き出す質的研究法である。これらを図にしたものがTEM図であり、本実践では経験したことに対する気付きのためのツールとして活用した。手続きにおいて工夫したことは、エピソード提示にあたり、主要部分を抽出しトピックごとに分けたこと、相手の身に立って共感的に理解するよう、その時の状況や気持ちを穴埋め形式のシートにして考えるようにし、共有したこと、成長過程をキーワード化し表現したことの3点である。

a. 題材名「4ヶ月を振り返って」

入学後から夏季休業前の4ヶ月間について振り返り、自己や仲間の変容に気付くことをねらいとした。本人及び保護者より承諾を得て、生徒Dの事例を取り上げ、授業を実施した。振り返り場面では、「みんなにはそれぞれの事情があり、一人一人悩んでいることは違うと思った」「嫌なことがあっても諦めないことが大事」「他の人も折り合いをつけている」「みんなも成長した、どれだけ成長したかがわかってよかった」という気付きが得られた。生徒D自身は、失敗だと思っていたことが結果的に成長につながっていたことに気付き、「葛藤」を繰り返し「折り合い」を付けたことに気付いた。また、「みんなの支え（友達、先生、保護者）」があって乗り越えられたことで自信が付いてきた、もっと褒められたい、認められたい」と語る姿も見られた。

b. 題材名「後期現場実習を振り返って」

初めての産業現場等における実習（以下、現場実習）の事後学習及び職業科、HR活動において、学級全員の事例を取り上げた。自身の実習を客観的に振り返ることや、仲間の実習から学ぶことをねらいとした。それぞれが特に印象に残ったエピソードを取り上げ、文章や箇条書きにして可視化し整理する方法や実習日誌を手掛かりとしてポイントを整理する方法等、生徒の実態に応じて表現しやすい方法を工夫した。授業後の振り返りでは、「小さいことに目を向けると、1つ1つ意味があると思った。」「みんな葛藤を繰り返し、頑張っていることがわかった。いろんな人の考え方を知れた」「自分の今までの出来事を思い返し、考えるきっかけになっている。他の人のことを理解でき、仲間のことを一緒に考えるようになった」「みんなで考えるとたくさんの方がいることがわかった。自分の考え方が変わったと思う」「見えない部分で多くの人の後押しがあった」等の気付きが得られた。最後に実習での成長過程についてキーワードでの表現を求めた（表6）。それぞれが思いに寄り添い、努力の過程を認め合う場面であった。

表6 実習を終えて

生徒	キーワード
A	注意力、運、気づきと対応
B	無遅刻無欠席、準備、味方
C	判断力、人間関係、期待
D	努力、成長、助力(思いやり)、協力
E	失敗を生かす、時間を守る、やることはやる、学ぶ
F	判断、一生懸命、気持ちの支え(人)
G	チャレンジ、励まし、変化、レベルアップ(120%)
H	気遣い、努力、成長

c. 授業場面における対話についての分析

TEM図を用いた現場実習の振り返りのうち、2事例について対話場面を分析した。対象生徒に対する、仲間の発言内容をカテゴリー別に集計した（表7-1、7-2）。

【事例1】（概要）通勤練習で予定のバスを乗り越してしまったが、学校に連絡し指示を仰いで自力で到着した。忘れ物をし、時間に余裕をもった行動が難しかった。

表7-1 対話場面の発言内容

カテゴリー	発言の概要 n=63
相手の思いを知るための問い(23)	・なぜ? ・どうして? ・どこから歩いてきたの? 他 20件
共感的なことば(20)	・あー ・大変だったね ・わかるよ 他 17件
価値付けのことば (9)	・みんなで考えたことは、次はわすれないよね。 ・これさ、今わかってよかったよね。他 7件
アドバイス (11)	・今回わかったことを次直せばいいと思うのよね ・自分のことを冷静に客観視すればいいよ 他 9件

【事例2】（概要）事情により実習期間が変更になった。みんなが学校で学んでいる時に実習をすることになった。期間中、行事があったが出られず葛藤もあった。たくさんの方の後押しにより、前向きにやり遂げられたことに気が付いた。

表 7-2 対話場面の発言内容

カテゴリー	発言の概要 n = 66
相手の思いを知るための問い(22)	・なぜ?・どうして?・どうやって?・何が違うの? 他 18 件
共感的なことば(20)	・そうかそうか・びっくりだったね・〇〇だったもんね 他 17 件
価値付けのことば (18)	・それでもさ,今わかってよかったよ ・みんなの励ましがチャレンジにつながったね 他 16 件
アドバイス (6)	・素直でいたらよと思う。気持ちを素直に言えばいいのよ。 ・そういう時は,先生に言った方がいいよ,すぐにね。 他 4 件

両事例ともに失敗内容に対して否定的な発言は1つも見られなかった。生徒達は仲間を取り巻く事実について問い、背景にある思いの理解に努めていると捉えられる言動が見られた。また、行動の過程に着目し価値付けたり、アドバイスしたりする場面も見られた。個々に相手の身に立ち、ことばを選んで伝えており、成功場面についても同様に肯定的な発言や称賛する発言が挙げられていた。

④目標設定 (ショートホームルーム・HR活動)

振り返りを活かし、目標の自己化を図るために、アクションシート(以下AS)を作成した。現在も教室内への掲示により継続した意識化を図り、取組を進めている。ASは校章をモチーフにし、3つの輪内には無理なく続けられそうなアクションプランを記入し、できた日付を記入しシールを貼ることとした。シールは最大1ヶ月の登校日数分貼れるようにし、月毎の達成度を可視化した。また、長期目標と短期目標の記載欄や自己評価に加えて他者評価を取り入れ、達成度を10段階で評価し、月毎に比較できるようにした。さらに「できた」「できなかった」といった表面上の結果に終始せず、その背景にある生徒の「思い」や「願い」、取組過程の「姿勢」を対話により引き出し価値付けることを大切にした。現在もASを基に、その日の取組を生徒同士で振り返り、対話する機会となっている。なお、目標設定において、教師や仲間からの助言を基に設定した目標は、「なりたい」「ありたい」自分に迫ったものが多く、より具体的であった。

(2)対話を重視した「語る会」、「座談会」等の計画と実施

①題材名「先輩から学ぶ～2年生と語り合う会～」(振り返り・目標設定)

これまで現場実習を2度経験している先輩に質問し、現場実習に対する具体的なイメージをもつこと、学校生活を振り返り新たな目標を設定することをねらった。1年生は、身近な先輩へ質問し「先輩の話を聞いて、失敗はプラスに変えていけばよいことがわかった」「自身を信用する、失敗に向き合うことが大切」「どんどん経験を重ねて成長することが大事。どんな人でもいいところを探して、ランク付けせず一人の人として見るのが大事」等の気付きが得られた。先輩からは、「仲間が実習をして思ったことを知れた」「1年生が実習のことをよく考えている。自分の経験が1年生に届いて頑張っていると思う」「今回みたいに、実習の経験を人に話す機会があまりないと思う。友人がアドバイスをされていて、そういう考え方もあった」と等の感想が寄せられた。先輩側にとっても、本授業をとおして、経験から得た学びを後輩に伝えることで、自己の「これまで」を意味付け、自己有用感を得る機会となったと捉えられた。

②題材名「1学年進路講話会～ようこそ先輩～」

後期現場実習後に1学年生徒33名を対象に実施した。本校卒業生を3名招聘し、進路決定までの経緯や働く生活を知り、自己の生き方を考えたり、「なりたい」「ありたい」姿を描いたりする機会として、①話題提供②シンポジウム③「先輩と語り合う時間」の3部構成とした。②では、「あなたにとっての学校生活は」をテーマに、キーワードで表現した。先輩3名は、「楽」「道」「仲間」と表現した。本学級の生徒が挙げたキーワードは「大変だ

けど乗り越えた」「気持ちの変化」「寄宿舎生活」「経験」「簡単そうで難しい」「楽しさと辛さ」「変化」「選択肢」であった。理由を問うと、個々の思いが込められていた。③では、3班編成とし、各自が事前に準備した話題で先輩と対話した。内容については、相談に関するものが多かった。授業後の振り返りでは、「先輩は自分以上に頑張り、自分の力で夢を叶えている」「友達の質問を聞いて、努力を知った」「振り返ると、楽しさや辛いだけではなく、日常生活で学ぶ中でできることが増えていることがわかった」「目的が大切だと思った。なんのためにやっているのかを大事にし、自分の生活を意識して振り返り生活したい」といった気付きが得られた。卒業生からは、「努力の過程を思い出し、気持ち新たに頑張りたいと思った」「後輩も当時の自分と同じことで悩んでいた」「後輩に伝えることで、自分自身を見つめ直す機会となった」といった思いが得られた。2年生と語り合う会と同様に、対話による相乗効果が確認できた。

(3) キャリア・パスポートの様式検討と試行

キャリア・パスポート（以下、CP）を用いた授業を展開するに当たり、生徒の実態や授業での活用等を考慮し、青森県教育委員会の様式例（中学校・高等学校用）を改変した。また、中学校から引き継いだ CP を用いて年度初めや節目となる時期に対話の機会を設定した。中学生の頃と「いま」を比較した変容への気付きや、その成長を自己評価する場面、友達から価値付けられる姿が見られた。また、定期的に目標設定と振り返りを行い、評価や具体的方策について生徒同士でアドバイスし合った。CPの活用については、一貫性のある問いによって、生徒が自己の成長に気付くことができると捉えられた。また、そのための教師の対話力の向上を図る必要性が確認された。

(4) アンケートをとおした変容及び考察

1 学年全員を対象に自己認識に関する調査（以下、調査）を実施した。調査時期は、4月及び7月、12月であり、質問項目に対し4件法で回答を求めた。各プログラムを実施した本学級生徒8名の平均値を上段に、他学級の平均値を下段に示す（表8）。本学級の生徒の平均は他学級の平均値よりも全般的に低かった。3回の調査で、問3・6・7の3項目について平均値が増加した。

表8 HR活動アンケート 上段 n=8 下段 n=25

質問項目	4月	7月	12月
1. 私は、今の自分に満足している。 ()内は、他学級の平均値	2.63 (3.28)	2.38 (3.28)	2.75 (3.48)
2. 私は、人の役に立つ人になりたいと思う。	3.25 (3.60)	3.13 (3.52)	3.50 (3.43)
3. 私は卒業後の夢や目標をもっている。	2.88 (3.08)	3.00 (3.28)	3.13 (3.17)
4. 難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している。	2.88 (3.52)	2.63 (3.40)	3.13 (3.30)
5. 困った時に周りの人に相談する。	3.50 (3.48)	3.38 (3.76)	3.88 (3.27)
6. 成功した時、なぜ成功したのかを振り返るようにしている。	2.63 (3.44)	3.00 (3.56)	3.38 (3.64)
7. 失敗した時、なぜ失敗したのかを振り返るようにしている。	3.00 (3.44)	3.38 (3.56)	3.50 (3.77)

問3については、日常生活でも自然とアドバイスし合う様子がみられるようになったことから、目標達成に向けての意欲が高まりつつあると捉えられた。

問6については、成功した時の振り返りについて、4月に「成功したらそれで終わり」「満足している」といった意見が挙げられていたが、実践をとおして成功過程に着目することや仲間からの価値付けを得る場面の意図的な設定、上手くいった手立ての情報共有を継続したことなどが一助となったと考えられた。

問7については、4月調査では3名の生徒が「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」と回答したが、7月、12月調査では全員が「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答していた。

問6、問7の思いの変容について表9に示す。12月調査では、「当たり前のようにやっている」「自分で何度も振り返っている」など振り返りが習慣化され、次へ生かそうとする姿勢が見られるようになった。

次に、4月調査に比べ7月調査で平均値が減少したが、12月調査では増加した項目について考察する。

問1については、7月調査において2名は増加、6名は減少した。結果を基に、個別に面談を設け、背景にある生徒の思いの理解に努めた。減少した生徒からは「自分はこのままでいけない」「友達のように頑張らなくてはならないと思っている」「先輩のようになりたい」といった、いまの自分をさらに高めたいという思いが挙げられた。一方で、増加した生徒からは「自分はこのままのペースでよい」などといった、これまでの自分と比較し、いまがよりよいと思った意見も挙げられた。12月調査においては、「どちらかといえばあてはまる」を選択した生徒は7名、「あてはまらない」を選択した生徒は1名であった。生徒からは「切磋琢磨できている」「友達はライバルでありよき仲間」などと、仲間からよい刺激を受け、「いま」行っていることに充実感を得ながら過ごしている様子が窺えた。一方で、「自分は未熟、まだまだこれから」という生徒もあり、それぞれが向上心を持ち取り組んでいることが確認できた。生徒同士が対話をとおして相互作用が働き、よりよくしたいという思いで取り組めたのではと捉えている。

問2について12月調査では、「人に信頼される人になりたい」「人の役に立てばまた依頼ももらえるし、やれることも増えてよい」「ありがとうと言われてうれしい」「必要とされたい」などと、自己有用感の高まりと捉えられる生徒の思いが確認できた。

問4については、各プログラムにおいて「傾聴する」「共感する」「相手の立場で考える」の3点を特に大切にしたことや、仲間同士や先輩との学び合いから多様な視点があることに気付き、他者の意見を受け入れたり、参考にしたりする意識が高まってきたためと捉えられた。また、多様な見方・考え方に出会い、気付きを得たことで、未来志向の意見が挙げられるようになった。特に、TEM 図演習の取組が一助となったと考えられ、実際に起こった事実について「失敗」や「思い出したくないこと」と捉えていたことが、協働的な学びにより新たな気付きを得るほか、そのときの状況に共感し価値付けてくれる仲間の支えにより、心境の変化があったと推察した。

問5については、各プログラムをとおして自分の思いを表出したり、仲間からのアドバイスにより納得解や最適解を見出せたりした経験から、相談したい気持ちが高まったと捉えられた。生徒Aは、「聞けないから相談しない」から「わからないままにしたらだめだから（相談する）」、生徒Fは、「解決できるかもしれないから」から「たまには誰かに相談することはいいと思う」、生徒Gは、「相談すると楽になるから」から「相談した方が自分の意見以外のこともたくさん聞けるから」とそれぞれの捉え方の変容が確認できた。また、相談する理由と相談することが多い人1名の記入を求めたところ、4月調査では、他学級と同様に教師や保護者の回答が大半を占めていたが、12月調査においては、7名が「友達」1名が「先生」と回答した。高校生の悩みと相談に関して、小倉ら⁴⁾は、相談相手として友人を選ぶ傾向にある人のほうが、そうでない人に比べて主に対人関係に関わるような部分での学校への満足度が高いこと、悩みの多い思春期・青年期において学校生活を楽しく過ごす上で悩みを話せる友人の存在が重要であることを述べている。各プログラムでの対話を中心に友達の存在がより強く認識され、共に学ぶ中で、自身において大切な存在であること、よき理解者であり信頼できる仲間という認識に変化したと推察された。

表9 振り返りに対する思いの変容

問	成功した時、なぜ成功したのかを振り返るようにしている		失敗した時、なぜ失敗したのかを振り返るようにしている	
	4月	12月	4月	12月
A	(2)満足している	(3)次も上手くいくため	(4)次も失敗しないように	(4)次も失敗しないために
B	(1)興味がなから	(4)次につなげたいから	(1)次のことを考えたいから	(3)人の意見を取れないから
C	(4)必然的に成功するはずがないから	(2)当たり前のようにやっているから	(4)考えないままだと次の時も失敗してしまう可能性があるから	(4)次も失敗したくないから
D	(2)満足している	(3)振り返る時間がある	(2)前に進まなければいけないから	(3)原因がわかるから
E	(2)それで終わり	(3)自分で何度も振り返っている	(2)思い出したくない	(3)自分で何度も振り返っているから
F	(4)どうやったかを思い出す	(4)次に空かす	(4)またやるかもしれないから、どうやってやったかを思い出して振り返る	(4)改善点を見つけて次に注意するため
G	(2)振り返ってもわからないことがある	(3)振り返ってわかるようにしている	(3)失敗したら次は成功するためにやっている	(3)次に生かせるから
H	(4)自分の備わった経験を見直せるから	(4)忘れたくないから	(4)次に生かせるから	(4)また失敗しないように

カッコ内の数値は、アンケート調査回答を示す。

4.あてはまる 3.どちらかといえばあてはまる 2.どちらかといえばあてはまらない 1.あてはまらない

(5) 教員対象の学習会及びインタビュー調査

本校教員を対象に、生徒理解や対話に関する研修会（令和4年1月，3月，8月，令和5年1月実施）及びTEMに関する学習会（令和4年10月；以下，学習会）を実施した。学習会は、任意参加とし、1学年教員を中心に約7割の参加があった。内容は、授業実践と同様の事例を扱った。学習会後の振り返りシートへの記載内容（表10）をテキストマイニング法で分析したものを図2に示す。A「ツールに関すること」 B「出来事に対しての見方・考え方」 C「生徒理解に関すること」 D「自身の資質・能力」に関する内容が挙げられた。

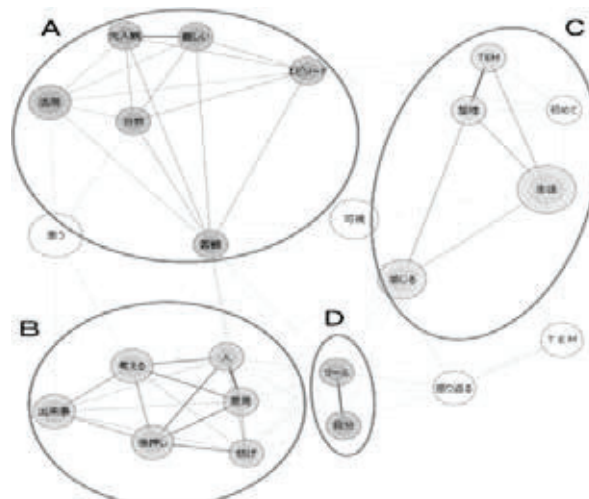


図2 教員の学習会に対する振り返り

表10 振り返りシートの記載内容（一部抜粋）

A ツールに関すること B 出来事に対しての見方・考え方	C 生徒理解に関すること	D 自身の資質・能力に関すること
<ul style="list-style-type: none"> エピソードを時系列にすることで教師側の先入観が入らず客観的に分析できる点がメリットであり、活用しやすいと思った。 TEM が生徒同士での振り返りに活用できるという点で画期的であると感じた。 TEM 図は過去を可視化することで自分の行動を振り返り、失敗が意味のあるものと価値付けし得る有効なツールだという学びがあった。 出来事に対して考えたこと、周囲の人との関わりなど後押しになっていることを可視化し、他者の意見も交えながら振り返ることができると思った。 もしかしたらゴールやターニングポイントを考えていく際に、自分が後押しされていることや妨げになっていることについて、客観的に捉えることができたり、他の人と意見交換する中で自己理解を深めたりできるツールや方法だと感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> 指導者が掛ける言葉に効果的な付加価値を付けることができると思った。この実践は、生徒自身が、より一層ポジティブなキャリア形成を主体的に行う力を身に付けることができると思った。 授業の中で振り返る場面があるが、ほとんど生徒個人の中で終結している。周囲の生徒の見方や考え方を加えながら振り返る方法は、生徒自身が多角的、多面的な見方を身に付けながら、より良いゴールを目指せるようになる良いきっかけとなると思った。 TEM というもの自体初めて聞き、何も分からず参加したが、生徒のエピソードを整理することができ、様々なパターンを想定することができて面白かった。 可視化することで、見えなかったことも見え、教師や生徒にもわかりやすくて勉強になった。 	<ul style="list-style-type: none"> 対話を通しての気付きと学びは、指導者が助言や指導するよりも、生徒たちの心に響く有効な手段・方法だと気付かされる毎日である。 いろいろな考え方を知るのは、本当に良いことである。 新しい発見ができた学習会だった。 同じ事例でも各班の先生方の見方が違い、新鮮であった。演習は学ぶこと、気付くことが多くあった。 生徒が気付き、学んだ後どうするかというところまで繋がっている指導も参考にしたい。 ホームルーム活動の時間の使い方を見直したいと思う。 実際に生徒と可視化し、心情を伝え合いながら進めているところも興味深く、実際に生徒と実施してみたいと思った。

次に、本校教員が見取った「本学級生徒の変容」と教員自身の「生徒理解への変容や思い」について、教科担当者に対して半構造化インタビューを実施した（表11）。

表11 インタビュー回答

A	入学時は、さまざまな困難を抱えていた生徒達も新たな環境の中、対話で思いを共有し行動へ移し成長していることを実感している。特に TEM 図の演習から、失敗だと捉えがちなものも、仲間とともに考えることで、次への意欲付けになっていたと捉えている。また、後押しやもしかしたらゴールを考えるとどの回も気付きを経て、最後は「感謝の気持ち」に変わっていた。生徒理解において自身の対話の必要性は高まっている。生徒の気持ちを上手に引き出し、思いに寄り添えるようになりたい。
B	授業の見取りから、アウトプットができるようになってきていると捉えている。自分の考えを相手に伝えようと言葉を探して伝えている様子が窺える。発言場面も増えた。自身においては、学習会に参加し、日々の出来事に対し、意識して小さなことに目を向けたり、気付きを大切にしたりするようになった。
C	相手考えた行動や、仲間を大切に、物を考えをプラスで考える姿勢が高まったのではと捉えている。演習を長期的に実施した効果であると思う。生徒と一緒に振り返ることの大切さに気が付いた。
D	周りを見て判断すること、困った時は相談することができている生徒が多いと感じる。見方・考え方の広がりが見られたのではないかと。生徒理解においては、これからも共感することを大切にしていきたい。
E	得意なことや苦手なことなど、自分のことが分かってくるようになってきた。苦手だと思っていることについては、今後どうしたらできるのかを前向きに考えている様子が見られている。仲間同士で相談している場面が多い。今後も、生徒の良さを見つけられるような視点を持ち、接したい。
F	意見を表出できるようになった。お互いが言い合える関係性ができており、何かあっても自分たちでどうにかしようと相談している。精神面もたくましくなったように思う。生徒の個性を尊重したい。
G	自主的なやりとりが増えたと捉えている。何か困った時は自分から相談することも増えた。廊下で会った時などに、話し合ってくる機会が多い。自身においても、関係性が高まったと捉えている。
H	何か困っている時に、どうしたらよいかを相談にくることが増えた。また、授業の中で仲間同士が意見交換し合いながら、よりより対応を考えている様子が見られている。

本学級生徒の変容についての共通点として、「他者理解」「仲間同士の協働」「前向きな姿勢」「相談」の高まりが確認できた。教員自身の変容や思いについては、自己を振り返るとともに、生徒理解をより深めようという思いで、取り組んでいることが確認できた。

5 成果と課題

本研究は、HR 活動を中心に対話を重視した実践の充実を図るとともに、効果的な手立てについて検討した。「可視化」「具体化」「共有化」「段階化」⁵⁾の視点を踏まえ、各プログラムを実践したところ、成果として以下の2点が挙げられた。

(1) 成果

①協働的な学びによる新たな気付きと動機付け

PATH, PAC 分析, TEM 図の手法を参考としたツールの活用による共同的な学びの充実を図ることによって、生徒同士の対話が促進され「協働的な学び」へと変化した。教師による指導だけでは得られにくい「気付き」のきっかけが多様にあることや、生徒自身の「動機付け」になることが確認できた。

②本研究において大切にしたい資質・能力の伸長

同年代の生徒同士や、先輩との対話から、「自他を相対化する姿勢」や、「相手の身に立ち考える姿勢」の高まりが確認できた。対話をとおして、資質・能力が育まれ、学校生活や授業などの各活動場面において物事の「見方・考え方」、「受け止め方」に広がりや深まりが見られた。

(2) 課題

本研究の課題として以下の2点が挙げられた。

①対話を大切にしたい指導の一層の充実

PATH, PAC 分析, TEM 図等の手法を参考とした実践においては、教師の柔軟なファシリテートや対話力が求められた。生徒理解において対話は重要であり、今後も教師が生徒の見取りを基に対話的にかかわるための取組や定性的・定量的な視点を踏まえた効果検証が必要である。

②カリキュラム・マネジメント

教科等横断的な視点で単元を構成し、学びをつなげていくことが必要である。今後さらに本校の強みや校内資源を活かし、学年間や学年を越えた対話を重点に置いた取組や先輩や教師がロールモデルとなり得る機会や場を教育課程に位置付けるなどの検討が必要と考える。また、生徒自身が振り返ったことや教師が評価したことなどを生徒と共有し、生徒自身が学習したことの意義や価値を実感できるようにすることが肝要である。

(3) おわりに

本研究では生徒の「思い」や「願い」を出発点とし、様々な実践に取り組んだ。引き続き生徒にとっての「なぜ・なんのため」を踏まえた学びを土台とし、「目標の自己化」の工夫を図り、さらなる内面の育ちを促す取組へと発展させていきたい。また、「いま」と「将来の学び」をつなぐために、生徒や保護者、教職員等との対話を大切に、生徒のよりよいキャリア発達を目指すとともに、自身も子どもたちと共に「学び続ける教師」でありたい。

引用・参考文献

- 1) 梶田叡一(1985) 教育新書4 自己教育への教育, 明治図書.
- 2) 梶田叡一(2007) 教育評価入門, 協同出版.
- 3) 菊地一文(2021) 知的障害教育における「学びをつなぐ」キャリアデザイン 本人の「思い」や「願い」を踏まえた「深い学び」の実現に向けて, ジアース教育新社.
- 4) 小倉正義・平石賢二・雑賀美希子・浜本真規子(2004) 中学生・高校生の悩みと相談に関するニーズ(2) 相談相手としての友人と学校満足度の関連から, 日本教育心理学会総会発表論文集.
- 5) 菊地一文・石羽根里美・岡本洋・田中美紀・藤川雅人・杉中拓央(2022) 可視化と対話の重要性を踏まえたキャリア・パスポートの活用-本人の取組に対する気づきや意味付けを促す活用のポイントと課題-. 日本特殊教育学会第60回大会論文集 CD-ROM, 日本特殊教育学会.